

国立民族学博物館蔵篠田統文庫図書目録

著者	石毛 直道
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	002
ページ	iii-857
発行年	1986-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10502/3407

序

ここでいう篠田文庫とは、国立民族学博物館の所蔵に帰した故篠田統博士（1899-1978年）旧蔵の図書である。

先生は東アジアの食物史を開拓した偉大な学者として知られているが、科学史、家政学、民俗学の業績もおおい。このような人文科学の分野に転じられたのは、第二次大戦後、戦傷の後遺症のため実験室での仕事がむずかしくなってからのことである。その以前の先生は、わが国における生化学の草分けの一人であり、また植物、動物の生理生態学、衛生昆虫学、医動物学の数々の業績をもつ理科系の研究者であった。自然科学の知識と歴史および人間性への深い洞察をそなえた先生はまさしく、八宗兼学の碩学であった。

先生の年譜、著作目録は本書と同じシリーズの国立民族学博物館研究報告別冊で近く出版予定の先生の残された研究資料解題目録に収録されるので、それを参照されたい。

先生が亡くなる数カ月前のことである。雑談のさいに「ワシが死んだあと面白いことをしてやる」といわれた。蔵書はすべて欲しい者にくれてやるが、遺言状で書庫へ入る順番を指定しておく、というのである。知己、門弟が指定順に書庫へ入り好きな本を好きなだけ持ち去ったらよい、というのである。「その順番がどうなっているか、サァお楽しみだね」と人びとの反応をあの世から面白がろうというのである。

しかし、一代の碩学の蔵書が散逸してしまうのは、学問上の損失でもある。先生のお楽しみをうばって申しわけないが、強硬にお願いして、その遺言状の件は取りやめとする約束をしていただいた。そして、先生の没後、すべての蔵書を国立民族学博物館が購入した。

したがって、本来ならば先生の蔵書の一部を受け取るべき人びとの権利を、わたしたちの博物館が横取りしたことになる。その罪ほろぼしとして、この目録を刊行して、先生と親しかった方ばかりではなく、ひろく一般の研究者にも篠田文庫を利用してもらえるよう便をはかることにした次第である。

1938-45年のあいだ、先生は陸軍の防疫の技師として中国大陸におられた。このとき、京都の自宅から蔵書のほとんどを中国へ送って利用していたという。それに中国で求めた書籍を加え、多数の木箱に詰めて、日本の敗色濃くなった頃、北京から自宅に送り返したが、ついに到着しなかったという。したがって、篠田文庫のほとんどの

書籍は先生が日本に引揚げられてから以後に収集されたものである。食物史を中心とする人文科学の研究に転じられてから購入されたものが大部分で、それ以前の理科系の研究者として集められた蔵書はほとんどない。

この目録は原則として雑誌をのぞいた書籍を対象として編集されている。全冊数7534冊の内訳は、一般書約6140冊、洋書約330冊、和本約520冊、漢籍約600冊である。現代中国語、漢文のみならず、ヨーロッパの諸言語に通じていた先生の蔵書としては洋書がすくないという感があるが、それは東アジアの食物史の研究を中心に展開した先生の後半生の興味のありかたをしめすものである。

約7500冊という冊数は先生のように博学の士の蔵書数としては驚くほどのことはいないといわれるかも知れない。ただし、それは先生の生涯の前半の蔵書をふくまないものであることに留意しなくてはならない。また、いわゆる「積ん読く」用の書籍の購入をされず、ほとんどの本は読了されたものである形跡がうかがわれる。

高価な書籍や稀覯本は、ほとんどない。書誌学の深い知識をもち、古典料理文献のテキストの校合などの文献史料の操作をよくなさったが、そのテキストのほとんどはコピーマシンの発達以前は、各地の図書館等の蔵書を写真複写したものをスクラップ・ブックに張りつけたものである（その目録は研究資料解題目録に収められる予定である）。また、自宅の近くの京都大学人文科学研究所の図書室をはじめ、さまざまな図書館をじつによく利用されていた。

篠田文庫は珍書、奇書をふくまぬかわりに、広大な知識の集成である。専門の食物関係の書籍や漢籍がおおいことはもちろんであるが、専門以外の書籍の占める比重がおおきい。その範囲がひろいことは、日本十進分類法にもとづいて100綱目に分類したこの目録のなかで、蔵書が欠除しているのは340 財政と730 版画だけであることからあきらかである（数字は十進分類法のコードナンバー）。

380 風俗習慣、民俗学に関する本がもっともおおく、750 冊、ついで、210 日本史、910 日本文学、290 地理・地誌・紀行、590 家政学、生活科学、490 医学・薬学の順となる。日本十進分類法にしたがうと食物関係や漢籍なども上記の分類のなかにふくまれることに留意する必要はあるが、おおむね先生の興味のありかたの傾向をしめすものとしてあげておく。

篠田文庫の漢籍の特徴のひとつは、いわゆる実学の書がおおいことである。「編集にあたって」に記したような理由で、本書においてはその分類にあたって、四部分類法を採用している。四部分類法では経、史、子、集の四部門に文献を大別する。その筆頭にあげられる経部は、周知のとうり、儒教の経典およびその注釈、評論、研究の

書籍が主であるが、ふつうの漢籍目録では、この部分に入るべき文献がおおい。しかし、篠田文庫では經部の書籍が比較的すくない。大きな比重を占めるのは、子部に分類される文献であって、それらは食品、食生活、料理法を中心とし、また、農家、医家、さらには天文、暦法、算術等の実用の書の類である。

また、先生は食物関係ばかりでなく、他分野の文献も意欲的に渉猟されたい形跡がうかがわれる。したがって、全体としてみれば、その所蔵されておられた漢籍は、一個人の収集した蔵書としては、おどろくべき多岐にわたるものであり、そのことがもうひとつの特徴となっている。たとえば、集の部に分類される文学作品が存外におおい。これらの文献を利用して、おこなわれた研究の一例として先生の「唐詩植物釈」をあげておこう。

この漢籍にあらわれる傾向は、この文庫に所蔵されている一般図書についてもおなじである。特定のイデオロギーやセクショナリズムにとらわれることをきらい、広大な知識の海を思うがままに航海した自由人としての篠田先生の人生が、その蔵書に投射されているのである。

篠田文庫をふくむ国立民族学博物館の図書室の蔵書はすべて文献図書資料データベースに登録されて、コンピュータ検索が可能ないように整理されている。本目録のうち一般図書の部は博物館のコンピュータに記憶されたデータをモノタイプに連動させて活字を組みあげる電算活版というあたらしい方法で印刷されている。そのため、博物館と印刷会社のことなるコンピュータ・システム同士での転換技術の開発が必要であった。その労にあたられた国立民族学博物館の技術室の方々と中西印刷の中西亮社長に感謝するしだいである。

この電算活版の採用により、図書目録類の作成におけるもっともやっかいな問題である印刷工程での誤植をなくすことが可能となった。ただし、印刷工程でのあやまりを防止することができても、もともとのデータ・ベースのまちがいはそのまま活字になってしまう。したがって、篠田文庫のデータ・ベースのクリーニングの作業が必要である。また、博物館の検索システム以外の書誌項目を加えた和本と漢籍の目録については手書き原稿を作成しなければならない。このような労おおく、地味な作業を担当してくれたのが研究仲間の植田啓司氏と大島新一氏である。また、これらの作業に必要な資金の一部はMCC食品株式会社社長水垣宏三郎氏のご援助によってまかされたものである。

この文庫目録作成もふくむ本館収蔵の篠田先生関係資料の整理は昭和55-59年度の

あいだ国立民族学博物館でおこなわれた共同研究『東アジアの食事文化の比較研究』班の事業としておこなわれた。本目録の作成にあたっては、班員諸氏のさまざまな協力をいただいていることを記して、お礼申しあげる。

昭和60年9月

石 毛 直 道